
春の真実

あららぎ慎駒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春の真実

【Zコード】

N4472B

【作者名】

あらいりあい 植駒

【あらすじ】

お母さんが亡くなつてちょうど一年。今日もマンションを見つめながら公園のベンチに座るおじいさんが一人。いつものようにわたらしが声をかけると、おじいさんは思いも寄らない話を始めた。

連日の雨がやみ、久々に青空が顔を出す春の日曜。春の草花は再び元気を取り戻していた。マンションの敷地に隣接するこの公園では、幼い子供が友達や家族と遊ぶ姿が目につく。爽やかな日差しに、無邪気な笑顔。そんな包むような温かさが、今日のわたしには悲しかつた。

わたしは公園の端っこに置かれたベンチに視線を向けた。そこには、公園ではなくマンションの方を向きながら座るおじいさんが一人。わたしも同じようにおじいさんの横に腰掛ける。

「暖かくなつてきましたね。」

「ああ。春は晴れている方がいい。」

そう答えるおじいさんの視線はマンションの一郭に向けられたまま。わたしはかまわずにまた話しかける。

「今日でお母さんが亡くなつて一年になります。おじいさんに会つたのも、そのくらいだから、もうすぐ一年ですね。」

「そうだったかな。」

今日のおじいさんは一段と静かだった。

一年前の今日、わたしのお母さんは交通事故で亡くなつた。その日わたしは、高校一年の春休みの真っ只中だった。受験とか進路だとか、真面目に考えないといけない時期で、悩むことも多かつた。そんなときにもう一つくれたのは、いつもお母さんだった。それなのに、急にいなくなつてしまつた。

お母さんのお葬式のことははつきりと覚えてはいない。だけど、今日のような春の暖かい日で、例年より早い桜が咲いていたことは覚えている。大好きな花なのに、こんな日に咲くなんて、なんて残酷なのだろうと思った。周りは、新しい生活が始まろうとしている

のに、わたしだけ取り残された。独り世界から放り出されたようだつた。その日から、わたしは下を向くようになった。周りの春特有の明るい雰囲気を直視できないでいた。

そんなある日、わたしは学校に向かう途中、人にぶつかってしまった。その人が今、隣に座っているおじいさん。「前も見ないと危ない。気をつけなさい」と一言注意をされた。それなのにわたしは、返事も返さず素通りした。

その日の帰り、公園の前を通り、今と同じように、おじいさんはマンションを見上げて座っていた。朝のこともあったが、何よりその視線の先が気になつた。ちょうどわたしとお父さんが住む部屋のあたりをその双眸は捉えていた。

「あの、今朝はすみませんでした。」

おそるおそる、わたしは声をかける。それにおじいさんは笑顔を返すだけだった。

「マンションがどうかしたんですか？」

「懐かしくてね。あのマンションが出来る前、そこには私の家があつたんだよ。引っ越し直前まで娘がぐずつていたのを思い出すよ。」

おじいさんの瞳は視線の先よりも、もっと遠くを映しているようだつた。

「戻つてあそこに住むのはダメなんですか？」

「もう、出来ないんだよ。」

おじいさんの言葉は妙に重たかつた。それ以上、聞いてはいけない気がした。

それからしばしば、おじいさんはその場所に現れるようになつた。顔を見る度、わたしはおじいさんに話しかけていた。

「私が生きている自分の娘にあつたのは、もう一八年前になる。最後に見たのは、一年前、娘の葬式だった。」

「私が生きている自分の娘にあつたのは、もう一八年前になる。最後に見たのは、一年前、娘の葬式だった。」

おじいさんは急に真面目な声色で話し出した。普段からあまり多くを語らないおじいさんが自分の家族について話すのは、初めて会ったあの日以来だと思つ。そのせいなのか、話の内容のせいなのか、わたしはおじいさんの話を真剣に聞きたいと思つた。

「一八年前、私は自分の娘に向かつて勘当といふ言葉を口にしてしまつた。」

「カンドウ？」

わたしには理解できない言葉だつた。

「そう、勘当。親子の縁を切る、と言つたらわかつてもらえるかな。」

わたしは反応に困つた。そつ言つものはドラマの中の話しだと思つていたし、仮にそんなことが起こつても、すぐに元に戻るものだと思っていた。それに、何故おじいさんがわたしにそんな話をするのか、わからなかつた。

「あの日、確か私の娘が大学生になつたばかりの春だつた。娘は彼氏を連れて家に帰つてきた。それはかまわなかつた。相手の男は社会に出たばかりの人間だつたが、なかなかしつかりしていく、私も気に入つていたんだよ。もしも縁が長く続くなら、娘が大学を卒業してから結婚なんかもいいだろうと思つていた。だがその時、娘はもう一人会わせたい人がいると言つた。私は耳を疑つたよ。お腹にいる赤ん坊だ、と言られたのだから。」

おじいさんの声はどんどん悲しさを含むように思えた。無理に話しているような雰囲気ではなかつたけれど、聞いていたわたしは、何故か苦しかつた。

「妙な気分だつたよ。怒りなのか、羞恥なのか、何とも言い難い感情だつた氣がするよ。私は酷く取り乱していた。結局、娘を怒鳴りつけることしかできなかつたんだから。そして娘は出ていつた。」

「娘さんを捜さなかつたんですか？放つておいたんですか？」

氣付けば私の口調は強くなつていた。まるでおじいさんを責めるように。

「捜さなかつた。」

「なんで？」

おじいさんはまた、空を仰ぐより遠くを見つめる。細めた目には、間違なくあの日が映っていた。

「捜せなかつた。捜す勇氣も、権利もなかつた。あれで良かった、と思ひ日もあつたさ。だけど、時間が経つにつれて後悔に変わるんだよ。苦しかつた。まだ一ハの娘に子供ができるて、それ自体は歓迎できることではないと思ったが、孫の顔が見てみたいと思ったのも事実なんだよ。それ以上娘を責めるつもりもなかつた。許してやりたかつたんだ。だけど、今みたいに携帯電話なんかも無い時代だ。連絡のつけようもない。もう、私は、親という資格さえなくしたのだと痛感したよ。」

妙に悲しくなつた。おじいさんの物静かな雰囲気は、老人特有の落ち着きだと思っていたわたしは、強い衝撃を受けた気分だつた。言葉も見つからず、おじいさんから視線を外し下を向いた。

「今日で一年だ。わたしの娘が亡くなつたのも。」

「え？」

不意におじいさんに向き直る。そして、一つのストーリーが突如湧き上がる。

「おじいさんは、ここで何を見ているんですか？」

「あのマンションさ。」

「なぜですか？」

おじいさんは、自嘲氣味の笑みを浮かべる。

「謝りたいんだ。娘に。ここは私と娘の家があつた。娘の大好きな家がね。それに、生きていた頃、新しい家族とここに住んでいたことを、葬式で知つたんだよ。馬鹿げているかもしれないが、ここに娘が戻つてくるよつたな気がするんだ。私の声も届く気がするんだよ。」

「何で気付かなかつたんだろう。あの日、このマンションではお母さんのお葬式しかなかつた。それに、おじいさんがいつも、わたし

達の部屋の方を見つめていたことも知っていたのに。

記憶の断片を探るうちに、一つの光景が蘇る。確か、わたしが小学校の低学年だったとき、お母さんの夢を聞いたんだ。お母さんは、「一人前の素敵なお母さんになつたら、おじいちゃん達と、このお家で暮らすことよ。」と言つた。その時の表情が、なんだか悲しそうだったのを不思議に思った覚えがある。でも、今ならわかる。それが真実なのだと。

「きっと、届きますよ。悲しい別れになつてしまつたけど、離れていても、心は親子なんだと思います。」

おじいさんは、びっくりしたようにわたしの顔をじっと見つめた。かと思うと、また空を仰ぐ。閉じた瞼の間から、一筋の涙が地に跡をつける。それと同時に、微かに唇が動いた。声にならない言葉は、公園に響く笑い声の中に消えていった。

(後書き)

初めまして、もしくはお久しぶりです。あらりぎ慎駒です。いかがでしたでしょうか？お話自体は完全なファイクションですが、それぞれの思いは、私の経験をベースにしてみました。話の中にリアリティを持たせたかったのですが、どうでしたでしょうか？自分では頑張つたつもりなのですが。最後までおつきあいいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4472b/>

春の真実

2010年10月8日15時46分発行